

令和7年度 自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

岩手大学教学マネジメントセンター、岩手大学教務委員会

（責任者名） 山本 欣郎

（役職名） 理事（教育・学生担当）・副学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>本教育プログラムを構成している全学教養教育科目「情報基礎A」及び教育学部教職科目「プログラミング基礎」は、教育学部1年生の必修科目となっており、全学生がプログラムを履修し始めている。令和7年度末現在、プログラムを履修している学生は520名となっており、申請対象学年を母数とすると100%の履修率となる。また、学生の履修状況（履修申告から課題の提出等）については、本学が導入しているWeb Class (LMS) を通じて、科目を担当する教員及び教学マネジメントセンター、並びに教育学部FD担当・学務担当が把握できるシステムとなっており、各授業科目の習得状況やプログラムの改善等について審議を行っている。</p>
学修成果	<p>全学教養教育科目「情報基礎A」に対するアンケートでは全26項目の質問中、学生が学習の効果を回答する項目が5件法で7つ設定されている。質問「履修を通じて知識や技能が身についているという実感がありましたか。」では、5件法のうち「5.とても実感があった」「4.実感があった」に回答した学生が78%となっている。教育学部の教職専門科目「プログラミング基礎」では、全17項目の質問中、学習の効果を測る5件法の項目が2つ設定されている。このうち、シラバスで示された「授業の目的・到達目標を達成できた」という質問に対して、「おおいにそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した学生は83%であった。これらの結果から、いずれの科目においても学生が授業を通して確かな学びと成長を実感しており、授業目的の達成に向けた教育効果が十分に発揮されていることが確認できる。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>全学教養教育科目「情報基礎A」では、前項と同様のアンケート調査の結果、「この授業のテーマや内容を学ぶ意義について理解できましたか」の質問において、5件法で3以上に回答した学生が96%となり、平均値は4.01であった。教育学部の教職専門科目「プログラミング基礎」では、「授業を通して新しい見方・考え方や知識を獲得できた」という質問に対して、「おおいにそう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した学生は88%であった。以上の結果から、両科目とも学生が授業内容の意義や新たな知識の獲得を十分に実感しており、学習理解の面において高い教育効果が確認された。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	<p>全学教養教育科目「情報基礎A」では、必修科目のためアンケートに「後輩等に推奨したいか」という質問は設定していない。学修の有用感や満足感を問う項目のうち、「授業内容は期待通りのものでしたか。」では99%の学生が「期待通りの内容だった」「期待以上の内容だった」と回答しており、多くの学生が「情報基礎」に対して有用感を持っている。教職専門科目「プログラミング基礎」では、「この授業は総合的にみて満足のものであった」に対し、82%の学生がポジティブに回答している。これらのことから「後輩等他の学生への推奨度」についても高い水準であることが推察される。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>本教育プログラムを構成している「情報基礎A」は全学教養科目であり、教育職員免許法施行規則第66条の6に該当する科目であるため、履修率は100%である。また、本学教育学部では平成30年度より独自に設定した「プログラミング基礎」を必修科目としており、こちらも履修率は100%である。したがって令和5年度（本プログラム初年度）から令和7年度までの2科目の履修率は100%である。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本プログラムの修了生が卒業する令和8年度以降、岩手県教育委員会及び企業等への卒業生アンケートに本プログラムの効果を問う設問を設け、外部評価を受けつつ、結果を踏まえてプログラム改善に活かす予定である。特に教育現場において、授業設計や学習データの分析により個別最適な学びを実現できる教員として期待されるほか、学校のICT推進を担う人材としても評価されると予測される。</p> <p>岩手大学では、NTTドコモ、岩手日報社等の様々な企業と連携協定を締結して教育・研究を推進している。また、本学教育学部は教員養成学部として毎年入学者の約60%を教員として輩出していることから、地元岩手県教育委員会とも継続的に意見交換を行っている。このような連携を活かして、本指導プログラムに対する意見をいただくだけでなく、一部講義では岩手日報、NTTグループ、岩手県立総合教育センターの研修指導主事を招請し、産業界の視点も取り入れた内容としている。また、令和6年度末より本学教職大学院で推進している「デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業(Xプログラム)」では、教育ビッグデータの取扱いやプログラミング教育を演習形式で取り入れる過程で産業界と連携している。今後も多様なチャンネルを通して産業界の視点を取り入れ、本プログラムのPDCAを推進していく予定である。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>本学部の本プログラム推進において最も重視しているのは、「理論」と「実践」をバランスよく配置することで適切に結びつけ、机上の知識にとどまらない力を育成することである。特に、現場を具体的に想像しながら創造的に取り組む姿勢を養い、即戦力となる人材の育成を目指している。学生アンケートの自由記述欄には、「実際の学校現場で活用できるシステムから発展的なプログラミングまで楽しく学べた」「難しい内容でも丁寧な指導と仲間の支えにより意欲を保って学習できた」「教科書にとどまらず、現場で活かせる形に工夫された指導が実践的で大変良かった」などの意見が寄せられた。これらの記述から、理論と実践を統合した授業設計が、数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」や「学ぶ意義」の理解につながっていると推察される。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>全学教養教育科目「情報基礎A」では、アンケート調査の「教員の説明や指導、教材の分かりやすさについてどのよう感じましたか」という質問に対して88%の学生がポジティブに回答している。教職専門科目「プログラミング基礎」においても、「補助教材（資料、教科書、スライド、黒板など）は学習の助けになった」との問いに対し、89%の学生が肯定的に評価した。また自由記述欄には、「説明が丁寧で助かった」という意見が多く見られる一方で、「説明が早かった」という声も寄せられ、学習進度に対する捉え方が学生によって異なることが示された。これらの結果は、一定の指導効果が認められると同時に、理解に不安を抱える学生への個別支援の必要性を示していると言える。今後は、学習ペースの差に対応できるようWeb Class (LMS) による事前資料の充実や復習教材の強化を図り、基礎から応用まで幅広い学習者が安心して取り組める環境づくりを推進していく予定である。</p>